

ロベルト・ユンクと広島
ウィーン大学日本学研究所・壱日友好150周年記念企画

史上初の核砂漠

1945年8月6日8時15分、広島すべての時計が止まった。史上初の原爆が投下されたのだ。その3日後には2発目が、歴史的に意義深く、美しい港町の長崎に投下された。この原爆は1発目より1.5倍の破壊力を持っていた。20万人を超える人々が広島と長崎で、即時に犠牲となった。この2つの美しい港町は、一瞬で地上の核砂漠と化したのである。



被爆直後の広島 1945年 撮影：米軍 提供：広島平和記念資料館

数えきれないほどの学徒と同様に、当時13歳だった私の伯父香川良夫は、その時中心街にいた。私の祖父は当時、神戸の三菱造船で技術士として働いており、広島の方が安全だろうという考えから、家族を疎開させていた。軍事産業で栄えていたにも関わらず、広島は大きな空襲から免れていた。それはすでに奇妙なほどであった。その日の僅か数日前に、一家は主人なしで広島に引っ越した。その日、私の伯母は、スカートの裾がほつれたという理由だけで学校に行かなかった。そのため伯母は、現在88歳になり、良夫は廿日市にある家（中心街から16キロほど南西）から一人で学校に行き、二度と帰らなかった。

祖母は翌日から何日も息子を探しに出かけ、後に被曝の影響で髪をなくした。私が小さい頃、祖母は毎日のように当時の悲惨な状況を語り聞かせた。黒焦げの遺体が街中にころがり、川の中まであふれていたこと。アスファルトの道は

熱く、分厚い絨毯のように柔らかだったこと。それは、地上の地獄絵図であった、と。当時 3 歳だった私の父は、よく覚えていないながらも、祖母がその後太陽の光に耐えられなかったため、暗い部屋に留まっていたと語ってくれた。祖母は、放射線被曝のため一定期間、視力を失った。懸命な搜索活動も虚しく、良夫の足跡は一切見つからなかった。



1942年頃の祖母系家族 後列左端祖父、前列左から2番目祖母、中央・良夫、右隣・伯母 ©香川家

原爆死没者追悼平和記念館では、現在も伯父の写真を見ることができる。被爆状況の説明文は、「被爆当日学徒動員で、小網町（爆心地の近隣）で被爆し、後日搜索したが遺品はいっさい見当たらなかった。よって遺骨もなく、墓にはその時の土を入れている有様である」となっている。この文章を読む度に、手厚く葬ることさえできなかった遺族のやり場のない怒りと悲しみを感じ、目に涙が溢れてくる。

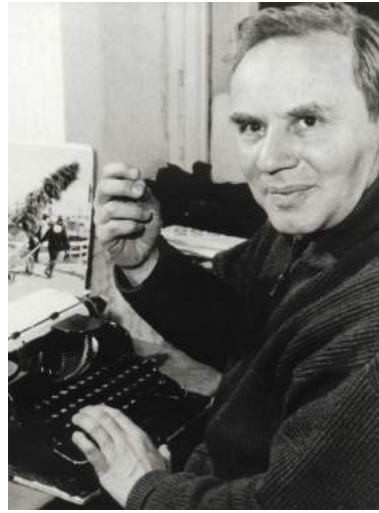
ロベルト・ユンクのヒロシマ取材 被爆者の心の傷を人類の記憶としたユダヤ人

戦後10年以上が経過した日本では、もはや戦後ではないという気風があった。米国による占領も1952年には終了していた。1972年まで占領が続いた沖縄は例外であった。各地で復興が進み、街の復興は広島でも進みつつあった。

しかし、被曝による後遺症に苦しむ人々にとっては、戦争中とそんなに変わらぬ苦渋の日々が続いていた。



1954年のユンク一家



1950年代 ユンクと相棒のタイプライター

両写真 ©ユンク未来問題図書館

ロベルト・ユンクは、**1957年5月**、たった一つのタイプライターとジャーナリストとしての熱い情熱を胸に広島にやってきた。米国の原爆研究者の運命と苦悩を描いた『千の太陽よりも明るく』は、彼の2作目の本として出版されたばかりであった。このベルリン生まれのユダヤ人ジャーナリストは、すでにベストセラー作家として著名であった。ユンクは、日本への出発前にルート夫人と息子ペーター・シュテファンの4回目の誕生日を祝ったばかりだった。取材のため頻繁に出張していたものの、今回はなぜか以前にも増して別れが辛かった。当時を振り返り、ユンクは自叙伝になぜ遠く離れた異国に、ルート夫人が太平洋を飛行機で超えることを嫌がったため、サンフランシスコから貨物船で行くことに決めたかが記されている。「原爆研究者に関する著作で対外的にも、また内面的にも緊張する作業のあと、私は休みなしに再び新しいプロジェクトに入っていた。そのことは、核の脅威が先鋭化したことからのみ説明できる。」

米国生まれで民間の研究者であり、通訳である小倉馨がユンクの取材のアシスタントとして雇われた。当初は、ユンクの2週間の広島滞在の後半のみ通訳兼案内人として活躍した。彼の英語は、二人の共通の友人で前半の通訳を担当した、やはり米国生まれのウィリー富樫より遥かに優れていた。小倉は、馨と

いう名前をアメリカ風にカールと呼ばれることを好んだ。

ユンクが見た広島は、半分復興され約 40 万人の人口を抱え、混沌とした産業都市であった。ネオンに彩られた歓楽街が広がる夜の光景など想像もしていなかった。他の多くの都市と同じように、厳しい貧困と犯罪が蔓延し、バラックが至る所に立ち並んでいた。

他都市との決定的な違いは、広島では人々が常に、原爆症の発症を恐れるノイローゼのような不安に苛まれていたことであった。新聞には、次から次へと増えていく犠牲者数が掲載された。被爆者の中には、この恐怖に耐えられず、自殺を選ぶものも少なくなかった。あの日、一切の傷も負わなかった小さい子ども達が、後障害と呼ばれる 10 数年の歳月を経た後に発生する症例で亡くなっていった。被爆者二世に属する子ども達の中には、生後間もない幼児で死亡する例も少なくなかった。被爆者はケロイドと呼ばれる、いったん治ったはずの火傷の跡が盛り上がり、完治できない傷跡を抱え、またそれによる差別に苦しんだ。女性は、健康な子どもを産めず、原爆症の影響で家事や仕事をするには体が弱すぎるという偏見から、「役立たず」として非難された。その上、原爆症は感染するという噂まで流れた。更に被爆者は、あの日、生き残ってしまったという犠牲者への罪悪感とも戦っていた。



ユンクと小倉馨 1960年 ©ユンク未来問題図書館

ユンクは、この取材から生まれた『灰墟の光』という本で、生存者のありのままの姿を伝えた。顔の見えない数値や、統計を記すのではなく、ユンクは生存者の苦しみ「心のケロイド」を世界に広めるため、最初のルポルタージュに数えられる著作を残した。その本の最終章に、明るく活発な女の子だった佐々木

禎子の短いエピソードが載っている。あの日、禎子は 2 歳で、爆心地から 1.6 キロに位置する自宅にいた。禎子は、爆風に飛ばされたものの、奇跡的に無傷だった。12 歳になるまで、優秀な短距離走者であった。その頃、ビキノ環礁の水爆実験によるショックで、人々は新たに核兵器の脅威に怯えていた。禎子は突然白血病を発症したが、決して希望を捨てなかった。命の最後の瞬間まで、千羽鶴を折り、願いが叶うという言い伝えを信じ、鶴に思いを託した。彼女の願いは無残にも叶うことなく、発病から 8 ヶ月後に亡くなってしまった。

オーストリアを代表する児童文学作家カール・ブルックナーは、このエピソードをユンクの本で知り、1961 年に『サダコは生きたい』という小説を書いた。この本は、今日までに 20 以上の言語に翻訳され、世界中で 200 万人以上に読み継がれている。多くの国々の学校で、平和教育の教材としても利用されている。冷戦下の時代、核戦争の脅威が緊迫する中、この物語が人々に及ぼした影響は計り知れない。

これら全ての悲惨な体験が訴えるものを、ユンクは核兵器の特徴として、著作のエピローグにこう記している。「広島への負の遺産は、歴史的建造物ではなく、被爆者である。その肌、血、一つ一つの細胞に『あの日』の記憶が焼き付き、刻まれているのだ。彼らは全く新しい種類の戦争、つまり休戦や平和条約により終了することのできない「終わりのない戦争」の最初の犠牲者である。その影響は、犠牲者の現世に留まらず、未来、つまり次世代をも破滅の渦へと巻きこんでいくのである。」

日本とオーストリア間の友情 - 相互に感化し、高め合う関係

ユンクの小倉への協力依頼は、合計 2 年半に渡る契約に発展し、往復書簡という形で行われた。ユンクは、後書きに著者の謝辞で、小倉の精確な作業を賞し、次のように記している。「その間、小倉は私の質問に答えて、きっちりと番号を振った 213 通の手紙を送り、また広島の人々にインタビューを行った。著者が個人的に知った質問相手との関係を、彼はそのインタビューでしばしば内面的な告白を聞き取るほどに深めた。残念ながら私は、この文書情報の断片的な一部分しか利用できなかった。その規模は、普通の本を 8 冊書けるほ

どに達していたからである。この資料が、研究機関に引き取られることを望みたい。」

小倉は、『ヒロシマに、なぜ』というエッセイの中で、手紙を送る際の様子を「心懸けて色とりどりの切手を、ベタベタと貼る。雨降りの日には、湿気で目がオーバーする。すると顔見知りの郵便局員が鋏を貸して呉れて、ぎっしりタイプした用紙の更に余白部分を切り落とし、制限重量をパスさせる。こうして発送された広島からの手紙を届ける配達夫も、綺麗な様々な日本の切手を見るのを楽しみにしていたという」と綴っている。カールは毎回手紙の冒頭に前書きのような部分を書き、ユンクへの畏敬の念と友情を綴り、街の状況を報告し、彼の解釈をつけた。取材作業を初めて経験した小倉は、それを「資料漁りというのは、心のときめきを覚える程スリリングなものである。後年米国の国立公文書館で、原爆投下当時の古い生資料を手を持った時、やはり同じ様に背筋が一旦氷の様に冷え、続いて温もりがジーンとやって来た」と記している。

ユンクについては、「ユンク氏は人間臭い」とし、全てにおいてダイナミックであったと書いている。彼は烈しく食べ、激しく働き、人の2倍の勢いで生きていた。「国際事件記者のバイタリティあふれる生きざまを、まざまざと見せつけられる思いだった」とし、自身については、「長い闘病生活をした後だった私は、七割五分の人生を送ろうと決心していた」としている。また、ユンクは外見にはかまわず、「服装はかの刑事コロンボスタイル。シャツがしょつ中ズボンの後からはみ出している」としている。そんな豪快なユンクでも一方では「神経質に黒い眼帯をかけて寝る。消灯がひどく恐いのである。子供の時から暗闇におびえる習性があったというが、私はむしろ暗い夜を強いられたナチスの追跡の悪夢にうなされる名残りをを見る思いがした」と綴っている。また、「被爆者をそっとしてあげたい。いや代わりになってでも叫んであげたいというジレンマは、原爆報道につき纏う永遠の課題である。ユンク氏を通して、執拗ともいえる性格、徹底した息の長い粘りといった日本人との文化的な異質性を、私は嫌という程知らされていた。そしてこの一人のヨーロッパの作家が、被爆者の代弁者たらんとしている存在の貴重さを、私は考えていた」と複雑な心中を吐露している。

『灰墟の光』の三人の主人公は、M.一夫、河本一郎と妻の河本時恵である。

芸術的な才能を持ち、繊細な青年であった M.一夫は、原爆による混乱で非情な強盗殺人を犯す程、精神的に病んでしまう。河本一郎について、ユンクは自叙伝に「刻々と自分の回りに迫り来る貧困に圧倒されて、彼は寄る辺なき者のために、とりわけ放射線病を病む多数の子どもと孤児のためにすべてをささげることができるよう、それまでの技師のキャリアを捨て去った。一目会った時から私は、この慎ましく犠牲心に満ちたまったく素晴らしい人物の、特別な資質を感じていた。そしてカールと一緒に、できるだけ頻繁に彼の訪問に同行した。生ける聖者と出会う、これが最初の、またこれまでに私が知る唯一の機会であった」と記している。

ユンクにサダコのエピソードを紹介したのは、この河本一郎であった。彼はまた、「原爆の子の像」建立運動を中心となって推進した。河本がサダコの遺影をユンクに見せた時、ユンクは彼女の写真を抱きしめてもいいか、と訊いた。河本とユンクはサダコの写真を抱えて記念撮影し、その後ユンクは当分の間サダコの写真を強く祈るように抱きしめていたという。



ユンクとサダコの遺影を持つ河本一郎



原爆の子の像 ©香川淑恵

河本一郎収集資料より 提供：広島平和記念資料館

広島でユンクと知りあった人は皆、彼をととても敬愛し、彼の中に大きな未来と希望を見出した。この被爆者の痛みを同じくする世界市民の存在に、彼らは生

きることの意義を再確認できたのである。

取材活動の魅力を発見した小倉は、その後、広島を訪れる世界の有識者を案内することの重要性を感じ、広島を伝える第一人者、通訳として精力的に働き、後に広島原爆資料館の館長となった。



ユンク一家と小倉一家 1970年 ©小倉桂子

ユンクは、「広島に到着した時私は、遠い異国の街の興味深い歴史を綴る一人のレポーターであった。しかし、長くこのストーリーに取り組むうちに、自身が外側や上から観察する者ではなく、この歴史の一部に属していることを自覚するに至った」と記した。

その後、ユンクは広島を4回訪れている。後に彼は、最初の訪問を振り返り、「広島を去った時、私は別人になっていた。私とその出来事を報じるのは、もはや単に関心があるからというのではなく、それが私の生に関わり、そこからおそらく未来の行動への教訓が与えられうるからであった。手遅れにならないよう、来るべき不幸を警告することが、この歴史状況において、名声やキャリアよりも私にとり、いっそう急を要すると思われたのである」と記している。

インタビュー：ユンクさんとの対話 今もなお、私の耳には彼の声が

名古屋大学名誉教授で、近代史を専門とされる若尾祐司教授は、十年前からユンクとその平和運動を研究している。研究の中で、行方不明と考えられている小倉書簡は、桂子夫人のもとに存在するという確信に至る。彼の考えは的中

し、2016年2月に小倉桂子が家の整理をした際、失われたと思われていた435枚に及ぶユンクへの小倉書簡が発見された。若尾はこの書簡が広島を後世に伝える重要な文献と考え、英語で書かれた手紙を日本語に翻訳することに決めた。彼は、「この小倉の手紙は、広島について収集した歴史資料の集成となっている。収集された資料集は、広島レポートと言えるもので、個人的な手紙の部分を含め、インタビュー部分は、小倉レポートと呼ぶに相応しいものである」と記している。若尾は、直ちに6人の協力者と翻訳チームを結成した。分担して文章を翻訳し、原本資料を探し、確認した。この研究成果をもとに、若尾教授は上下2巻に渡る本を2018年に出版した。

ウィーン大学日本学研究所でこの企画指導を担当するユーディット・ブランドナー女史の協力により、私は若尾祐司教授と小倉桂子女史、作家でロベルト・ユンクの息子であるペーター・シュテファン・ユンク氏にメールでご挨拶させていただいた。2018年12月に、故郷の広島に戻った私は、幸運にも小倉桂子女史と若尾祐司教授にインタビューさせていただける機会を得た。予定したインタビューの日は、偶然にもペーター・シュテファン・ユンク氏の誕生日であった。広島平和記念館の一室で、私たちは、オーバーラーのケーキと広島アンデルセンのドライフルーツやナッツの入ったパンを食べてお祝いした。(ウィーンで有名な洋菓子専門店と広島でそれに似た存在の大型ベーカリー)



若尾祐司教授と小倉桂子女史 2018年12月 ©香川淑恵

小倉桂子女史は、夫を亡くしてからの思い出を中心に語ってくれた。小倉馨は、エッセイを書き終えた直後の、1979年7月に突然、クモ膜下出血により亡くなったのだった。その半年後にユンクが広島にやって来た。桂子はまだ深い悲しみのどん底にいた。ユンクは彼女を通訳兼秘書として雇ったのだ。その時まで桂子は、幸せな主婦として、家でクッキーを焼いて、子ども達と夫を待つ生活だった。ある日突然彼女は、二人の子どもを抱える未亡人となった。通訳など経験もなかったし、ユンクが今回討論すべきテーマ・原子力発電に至っては、聞いたことすらなかった。ユンクの励ましは、単なる慰めではなく、桂子が自力でまた立ち上げられるようにするための叱咤激励で、温かく見守るものであった。桂子が悲しみを踏み台に変えることができたユンクの決定的な言葉をはっきりと思い出し、語ってくれた。

インタビュー時の桂子の言葉（録音から）：

君が今泣いているのが大切なんだよ。広島は涙の場所、すごい悲しみの場所。たくさん心を痛める人達がいる。その痛める人達の気持ちにならないと話が聞くことができない。けれども、君のところにきたら、愛する人をなくす悲しみを、君は今感じているだろう？ その悲しみこそが広島を世界に伝えるための大切な要素なんだ。だから **you are qualified**（君にはその資格がある）って彼はいうんだけどね。

一つはそれ、もう一つは、広島をずっと見てきて、多くの人達の悲しみと痛みを知っている、と。その2個の要素があるのにね、なんで君がこれから広島を伝えることができないことがあるのか、と。

Number 1 は、まずは私が聞くから、私に伝えなさい、と。電話でグジグジしている時、彼がそう言ったの。悲しい、それが大切って。

河本一郎から聞いて、三瀧寺に平和宝塔というユダヤ人墓石があることを知っていた桂子は、ユンクをそこへ案内した。当時、既に完全にコンクリート化してしまった街にユンクは怒りを覚えていたのだ。三瀧寺は、広島を中心部から北西の方角で三瀧山の谷に位置し、いくつかの滝があり、人々にとって緑のオアシスとして慕われている。ユンクは、昔ながらの自然そのまま、神秘的な場所を知れたことを喜び、「どうしてカールは今まで私を一度もここに連れてこなかったのか？ 桂子、君は街案内に関してはカールよりずっと上だよ！」

と言って笑った。

このユダヤ人墓石を訪れた時、ユンクは、最初の広島滞在の際に感じた直感の正しさを確信した。それは、人類史上最悪の犯罪の場となったアウシュヴィッツと広島で、「偶然にもまた難を逃れ、生き延びた者」としての絆であった。ユンクは、ホロコーストで四十人以上の親族を亡くしていたのだ。



三瀧寺 ユダヤ人墓石 ©香川淑恵

ユンクと小倉桂子 三瀧寺 1980年 ©小倉桂子

ユンクに勇気付けられ、小倉桂子は、ほとんど唯一の英語を話す被爆者として自身の被爆体験を語り始めた。有能な通訳になるため、昼夜を問わず語学だけでなく、原子力発電関連の専門用語や平和運動の動向についても熱心に学んだ。その上、1984年には「平和のためのヒロシマ通訳者グループ」を発足させ、海外から広島を訪れる人々にボランティアで通訳のサポートを提供し、平和運動の一端を少しでも多く感じ、知ってもらえるよう努めている。

小倉桂子がユンクと知り合ったのは19歳の時であった。彼女がユンクを思い出して語る話し方や、仕草から、彼女が現在も心でユンクと対話していることを感じ取れた。彼女を通して、私もロベルト・ユンク氏と直接会えたような気がした。小倉桂子女史は、現在81歳になられるが、心はとても若々しく、朗らかで、娘さんのようであった。バイタリティに満ちた姿が、ロベルト・ユンク氏そのものであった。

灰壙からの警鐘 - 未来へのメッセージ

「灰壙の光」の主人公の一人である河本時恵の言葉が、終盤に引用されている。「私たちは、人を軽視することや、怠慢な態度から既に非人間的な行為は始まり、その温床となることを確信するに至りました。核兵器は、一人一人のかけがえのない命に対する無関心の産物に過ぎません。もちろん原爆反対の抗議は必要ですが、それだけでは足りないのです。人間から人間へ、考え方の転換のため少しずつでも努力すべきなのです。ピカドンがなければ、私は中流のダンス教師になり、一人一人の人間がいかに貴重で、必要な存在であるかを知ることができなかったことでしょう。」

河本時恵の見解は、哲学者で平和主義者でもあり、ラッセル・アインシュタイン宣言でも有名な、ロベルト・ユンクの友人だったバートランド・ラッセル卿の見解と一致する。ラッセル・アインシュタイン宣言は呼びかける。

「私たちは、人類として、人類に向かって訴える——あなたがたの人間性を心にとめ、そしてその他のことを忘れよ、と。もしそれができるならば、道は新しい樂園へむかってひらけている。もしできないならば、あなたがたのまえには全面的な死の危険が横たわっている。」

中距離核戦力全廃条約の破棄が米国とロシア間で通告され、また武力競争への懸念が高まっている。その今だからこそ、人間性の、善の連帯を強めなければならぬ。無力感に陥って諦めてはいけぬのだ。フランスの作家で歴史家のアンドレ・モーロワは、著作『はじめに行動があった』で次のように訴える。

「最も深い革命は精神的なものである。精神的革命は人間を変革し、今度はその人間が世界を変革する。本当の革命とは、個人の革命である。つまり、たった一人の個人における、英雄でも聖者でも、その後続く数えきれない人々の理想となり、その模範のもとに、世界は劇的に変革しうるのだ。」

一人の人間が価値観を変えることで、周りの人間は感化され、さらに自身の変革すらも可能にする。真に平和な世界を構築するためには、まず、自身の今いる場所で、目の前の一人一人を大切にすることから始めるべきなのだ。全ての人間が生命の尊厳の哲学を共有するには、時間はかかるが、それでも人間の

変革のための唯一の方途であろう。常に変化し続ける政治状況に左右されるのではなく、世界市民としての意識を強め、我々が共存する地球を深く愛し、行動すべきである。

正しくユンクが、カールと結婚する 2 年前の桂子にこういったように。
「桂子、君は一人の人間に、八分目のように加減するのではなく、こぼれてもいいからどんどん愛を注ぎなさい。そうしたらきっと分かるよ、私があんたとしても戦争を辞めさせたいと切望する動因が。」



原爆ドーム 2018年 ©香川淑恵

参考文献

Jungk, Robert

1959 *Strahlen aus der Asche, Geschichte einer Wiedergeburt*. Bern: Scherz.

Jungk, Robert

1993 *Trotzdem: Mein Leben für die Zukunft*. München: Hanser.

Maurois, André

1966 *Au commencement était l'action* [Am Anfang war die Tat].
Paris: Librairie Plon.

NHK Hiroshima NHK 広島「核・平和」プロジェクト

2000 サダコ「原爆の子の像」の物語 (Sadako, Geschichte des
Friedensdenkmals der Kinder). Tokyo: NHK Publishing INC.

Ogura, Kaoru 小倉馨

1979 ヒロシマに、なぜ (Nach Hiroshima, warum?).
Hiroshima: Keisuisha CO., Ltd..

Robert-Jungk-Stiftung

2018 *Strahlen aus der Asche – Die Briefe von Kaoru Ogura an Robert Jungk*.
Salzburg: Robert Jungk Bibliothek für Zukunftsfragen.

Wakao, Yūji/Ogura, Keiko 若尾祐司、小倉桂子

2018 戦後ヒロシマの記録と記憶 (Aufzeichnungen über und Erinnerungen an
das Nachkriegs-Hiroshima.) Nagoya: The University of Nagoya Press.